トピックス

近畿地区国立病院第53回看護学会開催
～看護の未来を創る～

奈良医療センター　総看護師長　岡田 千鶴

平成23年10月22日（土）大阪国際交流センターにおいて近畿地区国立病院看護部長・副学校長・教育主事協議会主催による第53回看護学会を開催し、1,320名の参加がありました。今年度のテーマは前年度の「これからの看護、看護職の未来を考える～看護の力再発見～」から一歩進めて、「看護の未来を創る」といたしました。プログラムは、研究発表、シンポジウム、教育セミナー、特別講演の4部で構成しました。

研究発表は口述発表4題とポスターセッション53題の発表があり、日頃の看護の成果を発表し、共に考え、ディスカッションすることができました。シンポジウムは「頼りにされる看護とは」のテーマで看護実践者、看護学生、患者家族、医師、看護行政を経験した立場、の5名のシンポジストの発表がありました。意見交換から、看護師は患者さんのニーズを一番よく理解しており、傾聴し、共感し、目の前の患者のニーズに応えていくことができる。そして、EBNに基づく熟練した技術の提供が、患者から、家族から、仲間から、社会から「信頼」を得ることであると再確認致しました。教育セミナーでは東日本大震災後の看護師の災害に対する学習ニーズを捉えて、震災時に役割をもって現地に入った看護職がどのように活動したのか、国立病院機構の組織のスケールメリットを生かした「組織的な支援活動」や医療職以外（消防局）の災害支援の実際について理解を深められる企画と致しました。このセミナーをとおして災害に対して日頃からどのような備えをすれば良いのか、災害発生時に必要な医療・看護、実際の現場で支援活動に携わる人々への支援と支援活動に参加する人が理解しておくべきことを考える機会となりました。

特別講演は聖路加看護大学学長の井部俊子先生に「看護という仕事」というテーマでご講演頂きました。看護師の仕事のありようは法律、倫理綱領、組織の中で決められている。看護師は“人権ということに敏感でなければならない”そして組織とは何かを知り、自分が組織図のどこに位置するかを理解し、専門職業人としての生涯における能力開発を自分の責任で能動的に行うことである、と示唆を頂きました。活発に行われたフロアとの意見交換の中では「新人の時からキャリアを重ねて行くためにはベルトコンベア式教育は個にあわない、あえてフェイスtoフェイスで顔をつきあわせた意見交換が必要であり、チーム間での議論が必要である」等の具体的な言葉をいただきました。

看護師の役割拡大が期待され、特定看護師（仮称）の誕生を目の前にして、看護の成果を共有しながら、未来に向けて、改めて看護とは、看護職は何をすべきなのかについて深く考え、専門職としてより強く使命感を感じた学会でした。